溝口正人氏の討論に対する回答

THE AUTHOR'S ANSWER TO DISCUSSION BY MASATO MIZOGUCHI

(Masato MIZOGUCHI, J. Archit. Plann. Environ. Eng., AIJ, No.494, 285-286, Apr., 1997)

鈴木 賢次*

Kenji SUZUKI

The floor plan which I have drawn in my paper was based on the following studies; the interpretations of the descriptions of the diaries, the relationships among the rooms next to each other and between the Shinden of Prince Sadafusa's palace and Nanden during the period of its being a temporary Imperial Palace. Mizoguchi's indication that the floor plan is restored on the premises that the plan was square, therefore, is not appropriate.

Keywords: *Muromachi Era, Prince Sadafusa's palace, Imperial Palace, Shinden, Floor plan*

室町期、貞成親王御所、内裏、寝殿、平面

拙稿「仮皇居になった伏見宮貞成親王御所の寝殿（仮皇居時代の南殿）の上段と平面」に貴重な御指摘、御意見をいただきありがとうございます。

室町期の貞成親王御所の寝殿、後の仮皇居の南殿について、史料を総合的に検討して、両者の復原平面を推定したのですが、討論は史料ごとに解釈の相違について言及していますので、質疑の項目にそって私見を述べさせていただきます。

1. 平面の復原について

推定復原平面の作成は拙稿の記述のとおり、史料の解釈、とくに室の隣接関係、貞成親王御所の寝殿と仮皇居時代の南殿との室の対応から、結果としてもっとも妥当な推定として導き出されたものである。

『匠明・殿屋集』の「昔六間七間ノ主殿之図」との比較を行ったのは、規模が対応したことのみで論じたのではなく、推定復原平面の構成内容を明らかにするための方途であった。復原平面の試案を提示しましたので、その構成の基本的性格について考察することは重要なことと考えました。

したがって、「主殿之図」との比較から、矩形平面を前提にしたというのは的確ではありません。溝口氏の質疑が平面の外形に対する批判に終始している点は残念です。

2. 『綱光公記』所収指図の室名について

溝口氏が御湯殿上の妻戸間と解釈する『看聞日記』嘉吉3年11月3日条の「御所二も御湯殿有室礼、〔御湯殿上妻戸間被成御湯殿云々〕」〔以下〔〕内は割注〕という記事は重要と思われますが、御湯殿と御湯殿上が併記されていることに留意すべきです。御湯殿上にある妻戸間であったという場合、皇居となった御湯殿の室礼において、御湯殿上の一部しか使われなかったということになるのでしょうか。

この妻戸間の解釈については、今回、他の史料を補足して検討してみたい。『享徳二年晴之御鞠記』（『群書類従・巻第353』）には、「御まりのつばは、西のへい中門のうち、ぎぢやう（〔傍書〕議定）所のまへなり。みすかけわたして、車よせのつまどの間、一けんのすのこをきりさげて、うげんの端さしたるたゝみ二枚をしきて」と記されている。妻戸間が単独で用いられ、議定所との関連も窺えるのである。

また、『綱光公記』の享徳3年6月17日条には和歌御会で議定所が使われ、「出御議定所、（中略）次親王御方自年中行事迈入（〔傍書〕議定所）當間〔西面〕座〔東面〕、次帥卿以下次第入西面北之第一間着座、〔御湯殿上也、議定所狭サ間白地被用之、見指図〕」とある。御湯殿上の議定所側は大納言以下の席であり、天皇の座は議定所にあった。議定所と御湯殿上とが合わせて用いられているが、

* 日本女子大学住居学科 教授・工博

Prof., Dept. of Housing & Architecture, Japan Women's University, Dr. Eng.

妻戸間の記述はない。天皇の座から考えれば、妻戸間が議定所側にあってよいと考えられる。前の御湯殿の室礼でも、御湯殿上と妻戸間が用いられたと解釈されよう。

3. 『実熙公記』所収の記事について

すでに川上貢氏が指摘しているように御湯殿上と常御所には密接な関係があった。西第一間が「御湯殿上」で、その東の「北面廊簾台」と合わせて会場を設けている。「御湯殿上」が寝殿以外の別の場所にあれば、溝口氏のような指摘もありうるが、「御湯殿上」が貞成親王御所時代、仮居居時代を通じて寝殿（南殿）以外の場所にあったという記録はないし、応永度や康正度の内裏の清涼殿の例を見てもそのようなことは考えにくい。「北面廊簾台」の「北面廊」に拘泥しているようだが、その存在は定かではなく、北面の廊というのも奇異なので、「北面廊簾台」は北面にある廊状の簾台と解釈しても問題はないであろう。

なお、この記事によれば、御湯殿上の御座と簾台の公卿座とで、床の高さに、長押分の差があったことは分かるが、殿上人座については「長押東」とあって床高の高低を述べていない。ここで問題があるとしたら、それは床の段差の形状についてである。そのため、常御所の庇間の床高の対応関係として、「常御所の庇間の床高は母屋の床よりは簾台の床に関連することになる。」という記述にとどめた。上段・次段（下段）を含めて、床段差の形状については、今後も探究しなければならないと考えています。

4. 『建内記』所収指図について

御懺法道場の指図は東面御座敷とされていただけでなく、「今度此皇居於（〔傍書〕御殿）東面被行之間」とあり、御殿東面ともされている。したがって、「御殿也、御帳等如例」の書き込みにある御殿は、この指図の南にさらに別の御殿（室）があったのではなく、この指図が御殿であることを示している。

聴聞所の南北の間数については、底本所収の指図によれば、図の柱間が不正確ではあるが、南側が2間以上あったとするのはとうてい無理である。

仮柱については、その場所が明記されていないので、推測の可能性はいくつかあるが、ここでは割注の位置を重視して解釈しています。

5. 常御所の構成について

『看聞日記』、永享8年8月29日条にある「常御所母屋御簾卷之、（〔傍書〕但西方一間垂之）西障子屏風一双立廻、廂御簾垂之、西方中央屏風一立、簾代東障子二副テ棚一脚立、茶湯茶具足等置、其西、中央屏風一立、〔末口、〕此所御膳運送路也、〔一献於台所調之、男一献ハ自台所、簾代西障子口へ進…〕」の記事では、簾代が常御所の母屋か庇の西にあったとする溝口氏の解釈はどの部分によるのか不分明である。記事の順序からということかも知れないが、「簾代東障子」と「簾代西障子口」の対応からいえば、簾代が常御所の西にあったとするよりは、母屋や庇とは別に簾代の東・西にそれぞれ障子があったと考えられる。したがって、母屋、簾代、庇の構成が順当であると推察される。

6. 「文安二年踏歌節会記」（『久我家文書・第1巻』所収）について

文安2年（1445）のこの記事によると、寝殿の西南の二間が公卿座となり、その北西に六間の室があることになる。ところで、この南殿での踏歌節会をみても、享徳3年（1454）正月16日の場合、「長橋局にて被召御装束」（『康富記』）とある。『建内記』の文安元年4月18日条、「内々出御西一對西面簾中、〔勾當内侍局也、雖無長橋、号長橋也〕」や、同4年正月7日条、「内々出御御対屋西妻簾中、〔當時雖無長橋、号長橋局、勾當内侍局云々、〕」に記されているように常設の長橋はなく、西対の西面がそれを代用していた。このような例から考えると、公卿座の北西の六間は寝殿内になくても、西対の六間が用いられたとしても文安2年の踏歌節会の記事に矛盾しない。

7. 旧仙洞御所との関係について

この部分の移建についての質疑は、寝殿か、あるいは東対のことか、どちらを問題にしているのかがはっきりしない。寝殿であれば、川上貢氏の指摘がありますし、建内記の文安4年3月6日条の「仙居事、後年被壊渡以寝殿・（〔傍書〕対屋等）被進、伏見宮、點東洞院以東〔仙居之東也〕、伏見宮移住数年、近年為皇居也」にあるとうりです。

東対については、拙稿で取り上げておりませんし、北面廊については先に述べました。

8. おわりに

史料の解釈で、相違点はまだあるかと思われませんが、質疑にあった論点には回答いたしました。推定復原平面図は、この回答からも妥当と考えます。なお、このような推定復原図は試案がなければ成立しません。研究の前進のために別案の提示を期待します。

（1996年12月20日原稿受理、1997年1月21日採用決定）